同じ ≪to eat≫ でも，"vulgar" であるといった様に，単語の level が示されている。この社会的に定まった level は，我々外国人にとって最も困難な問題の一つだといえるが，この点について説明が加えられているということは，この辞典を非常に有用なものとしている。本書では，archaic, colloquial, common, deferential, derogatory, elegant, epithet, euphemism, expletive, figurative, idiomatic, illiterate, literary, obsolete, obsolescent, royal, sacerdotal, slang, vulgar, written の計 20 の項目が用いられている。

③ 各単語について，その単語を中心として作られる phrases や idioms があげられており，反意語，同意語も適当に示されている。更に，必要な場合には，"Note" の項を設けて，当該単語の用い方や似た意味を持つ他の語との相異などについて，例文と共に説明が加えられている。この様な意味で，本書は単に受動的に引くだけの辞書としてのみならず，タイ語を書き話す場合にも充分役に立つと考えられる。しばしば用いられる固有名詞，称号名，機関の名称なども取り入れられており，実用的である。

発音について疑問な点として，例えば，≪本≫ を表わす語は /nǎŋsǐy/ が普通であるが，本書では /naŋsǐy'/ と表記されている。この様な相異はタイ人の間でも個人的に変動のある可能性が強いから，両方を記して注を付すべきであろう。なお，p. v, 37 行の ≪to be big≫ を意味するタイ語形は誤植で，正しくは khɔɔ khwaaj のかわりに tɔɔ tàw を用いる。本書の最初の部分に付された Brief Description of Thai も有益である。 (桂満希郎)

Hla Pe: *Burmese Proverbs*. John Murry, London, 1962. ix + 114p.

本書は，School of Oriental and African Studies, University of London の教授でありビルマ語研究の第一人者の一人である Hla Pe 教授による。ビルマ語諺集とでもいうべきものである。著者自身も序文で述べている様に，本書はビルマ語の諺の網羅的な収集ではなく，また学問的な研究書でもない。しかし，ビルマ語を学習しテキストを読む段になると，役に立つところ大である。日常の会話，あるいは小説や新聞などにおいても，諺の用いられる頻度は，日本語においてよりもビルマ語においての方が，はるかに高いといえるであろう。これらの諺は日本語の感覚からすれば意味を把握することの極めて困難なものが多いが，その様な際，本書は手ごろな参考書としてよく役に立つであろう。

本書は，Introduction，本文，原文から成る。Introduction においては，ビルマの諺に関する簡単な説明のほかに，Political Setting, Cultural Setting, Economic Background, Social Environment について，諺と関連を保ちながら，概略的な説明が加えられている。本文におさめられた諺の数は 496 であり，Human Characteristics, Human Behaviour, Human Relationships, The World, Man, の五項目に分離されている。本文にはこれらの諺の英訳とそれらに相当する英語の諺とがあげてあり，原文は romanize された形で巻末にまとめられている。代表的な諺は大体カバーされているが，明らかに外国からの借用であるものや，単なる言葉の遊戯，例え話などの類は除外されている。この撰択，分類の基準がややあいまいに思われるが，研究書ではないから，やむを得ないであろう。

上に述べた様に，ビルマ語を読む際の参考書としての実用的な意味以外に，本書にあげられた原文と英訳，あるいは英語の諺とを対照すれば，ビルマ語の簡結な表現法とかいわゆる「ビルマ語らしさ」を理解するという意味からも興味の持てる書である。この点から，巻末にまとめられた原文は，本文の英語と対照してあげられていた方がより良かったであろう。

(桂満希郎)

William A. Smalley: *Outline of Khmu? Structure. An Essay of the American Oriental Society No. 2.* New Haven, Conneticut, 1961. xix + 45p.

クム語はラオス北部を中心に東北タイから北ベトナムにまで分布するモン・クメール系（パラウン・ワ語群）の言語であるが，これまでにこの言語について報告されることはあまりなかった。本書は著者が 1951—3 にルアンプラバン周辺で採録した資料にもとづく *Outline of Khmu Structure* (University Microfilms Publication No. 17,081. Columbia Univ. dissertation. 1956) を僅かに短かくしたものであっ